

ブチャ虐殺は紛れもない ジェノサイド、拷問遺体 が告発する真実

ウクライナ占領地で暗躍する「スペツナズ」の蛮行

2022.4.7 (木) 伊東 乾

ロシア

ヨーロッパ

フォ

安全保障

f シェア 91

共有する

① 2 3 4 5



ロシア軍が撤退したブチャの町でロシア軍による拷問・虐殺の事実が次々と見つかった。写真は3人の男性の遺体の前に立ちすくむ女性（4月5日ブチャで、写真：AP/アフロ）

ウクライナ戦争初期にロシア軍が進駐し、1か月の占領後に撤退、ウクライナ側に奪還されたキーウ（キエフ）近郊の町ブチャ（Bucha）。

人口4万の小さな町ブチャで（<https://www.yomiuri.co.jp/stream/article/19115/>）少なくとも410体に上る一般市民の拷問・虐殺遺体が発見され（<https://jp.reuters.com/article/ukraine-crisis-kuleba-bucha-idJPKCN2LW1OL>）国際的に大きな波紋を広げています。

占領中の3月中から、衛星写真などを通じて、路上に遺体が散乱している可能性（<https://jp.reuters.com/article/ukraine-crisis-bucha-images-idJPKCN2LX0TU>）が指摘されていました。

実際にロシア撤退後、ヴォロデミール・ゼレンスキー大統領自身を含むウクライナ側が踏み込んでみると、路上や屋内、地下室などに死体が散乱。

ジーンズ姿のまま両手を後ろに縛られ、頭部を撃ち抜かれた状態の遺体など（<https://www.sponichi.co.jp/society/news/2022/04/05/kiji/20220405s00042000133000c.html>）凄惨な拷問の様子が明らかになってきました。

残虐行為、戦争犯罪はウクライナ戦争の随所で発生、ブチャの虐殺は「氷山の一角」とも捉えられています。

こうした「ブチャの遺体群」は日本の報道陣も確認している模様で（<https://www.fnn.jp/articles/-/342644>）、この時期に市民を対象に何らかの拷問、殺人行為があったことは、まず疑いようがありません。

しかし、ロシア外相は公式に否定（https://news.tv-asahi.co.jp/news_international/articles/000250414.html）し、国連安全保障理事会・緊急会合の開催を要請すると表明。

他方、国連のグテレス事務総長は「ブチャで殺害された民間人の画像に大きな衝撃を受けている」「独立した調査によって、説明責任がしっかりと果たされることが不可欠だ」（<https://www.jiji.com/jc/article?k=2022040400159&g=int>）と異例の短信を公表。

ネット上では「遺体写真は二セモノ」「その証拠に、遺体が動いた」などと、ロシア側アカウントからのフェイク情報も大量に発信されており（<https://news.yahoo.co.jp/byline/kazuhirotaira/20220405-00289950>）見え透いた責任回避の工作が観察されます。

このような統制の取れない軍隊のあわただしい撤退後、残虐行為の証拠が残されるさまは、アウシュヴィッツ・ビルケナウ強制収容所の解放を彷彿させるもの、まさに「ジェノサイド」「ホロコースト」以外の何物でもありません。

ロシア側の戦争犯罪は動かしようのない事実となりつつあり、司法訴追の可能性も現実味を帯びてきました。

黒・濃緑と正規軍、3種の軍服の兵

① 2 3 4 5 →

ブチャ虐殺は紛れもない ジェノサイド、拷問遺体 が告発する真実

ウクライナ占領地で暗躍する「スペツナズ」の蛮行

2022.4.7 (木) 伊東 乾

ロシア

ヨーロッパ

+ フォ [?]

安全保障

f シェア 91

in 共有する

1 ② 3 4 5

黒・濃緑と正規軍、3種の軍服の兵士

このような中、4月6日付 AFP通信は、ブチャを占領していたロシア軍に「3種類の軍服」の兵士がいたことを、現地住民の証言として報じています (<https://www.afpbb.com/articles/-/3398904>)。

ロシア軍の侵攻初期にやって来たのは、ソ連時代から見慣れた軍服のロシア兵で、大半は若者でした。

ところが占領から2週間ほどすると、そのような若者より年上で、2種類の軍服を着た年配の横暴な軍人たちが現れ、街で残虐行為を働き始めたというのです。

前述のAFP電によれば、2週間後＝3月半ば頃から現れるようになったのは通常の正規軍と異なる「黒」と「濃緑」の軍服を着た40歳以上の兵士たち。

「黒」と「濃緑」の集団は正規軍よりも「良い装備」を持ち、また一部はただちに残虐な行動を取り始めます。

市民は移動を禁止され、食料などの買い出しは女性だけ許可。スーパーに買い物に行こうとした男性が屋外で発見され、直ちに射殺されるのが目撃されました。

屋内で、日用品にも事欠く生活を余儀なくされたブチャ市在住の証言者である女性は、正規軍の若い兵士に「子供たちに何を食べさせたらよいのか？」と訴えました。

すると若い兵士は「配給品や食料をもってきてくれた」。

そのような「良い人」も正規軍の中にはおり、そんな若い兵士から「住民の移動を禁止したのはFSB（ロシア連邦保安庁）で、とても暴力的な特殊部隊」だと教えられた、とAFP電は伝えます。

察するところ、上の、通常と異なる「濃緑の制服」（<https://www.iccrp.org/en/fsb-the-spies-that-rule-over-russia/>）あるいは「黒」（<https://apkpure.com/%D0%BE%D0%B1%D0%BE%D0%B8-%D1%81%D0%BF%D0%B5%D1%86%D0%BD%D0%B0%D0%B7/com.kristi.specnaz#com.kristi.specnaz-1>）の中年の軍人たちは、FSBの特殊部隊スペツナズの可能性が高いでしょう。

カエルと蛇：ロシア武力の多重構造

ブチャ虐殺は紛れもない ジェノサイド、拷問遺体 が告発する真実

ウクライナ占領地で暗躍する「スペツナズ」の蛮行

2022.4.7 (木) 伊東 乾

ロシア

ヨーロッパ

+ フォ [?]

安全保障

f シェア 91

in 共有する

1 2 ③ 4 5

FSBスペツナズ兵士が、住民の射殺や拷問など、残虐行為を働いたと考えられます。

これに対し、**黒色の制服**の兵士たちは、前回稿 (<https://jbpress.ismedia.jp/articles/-/69568>) で解説したプーチン大統領のボディガードが40万の軍勢に膨れ上がった「ロシア国家親衛隊」**グヴァルディア**の兵士であった可能性があります。

上リンクの写真で、プーチンがグヴァルディアのゾロトフ隊長に手渡ししている旗が「白黒旗」なので、以下では「親衛隊」を「黒」と記すことにします。

ただし、写真のゾロトフは濃い緑の軍服、その横の護衛官は黒の軍服、どちらの色も使用しているため、ブチャの軍服の色に関して断定はできません。

ただ、一目見て違う軍服、指揮系統の違う3つの部隊がブチャに進駐していたことはまず間違いない。

これらの現地第一線の見撃情報から、ウクライナ占領地の最前線で何が起きていたか、ロシア暴力装置の3重構造を考察してみましょう。

カエルと蛇：ロシア武力の多重構造

ウクライナ国内はロシア侵攻以前、武装のない民間警備員が治安維持に当たっていたとのことですが、若者主体の通常軍が進駐してきた時点で、みな逃げ去ってしまったと先ほどのAFP電は伝えます。

いったん武力侵攻したのちは、地域住民を力で押さえつける必要がありますから、治安警察＝国家保安庁FSB、つまり軍隊規模に拡大した秘密警察という、ソ連～ロシア定番のパターン、かつてチェチェンでもドンバスでも繰り返されてきたパターンが、ブチャでも繰り返された。

その「FSB進駐」が、住民の無差別殺傷という「威嚇行為」に始まり「裏切者」を見つけては地下牢で拷問、殺害などに及ぶ恐怖支配に発展。

ちなみにフランス革命初期にこの「一般市民の恐怖による支配」を名付けたのが「テロール」「テロリズム」というフランス語の起源です。

定義に従って正確に、FSB軍勢が行ったことは「テロ」であり、「濃い緑色の軍服」と思しいFSBスペツナズの兵士たちは「テロリスト」ということになります。

あえて言えば彼らFSBは市民を襲う「蛇」と言えます。

また、ロシア戦争指導部の都合として、この「市民への残虐行為」はFSB軍勢が行わねばなりません。

通常軍はあくまで「人道支援」のための「特殊軍事行動」を取っている建て前ですから、住民殺害など「知らぬ存ぜぬ」で押し通す必要があります。

「蛇」とは違う「カエル」の軍隊ですよ、という強弁です。

蛇を殺すナメクジ 「ナチスの二の

← 1 2 ③ 4 5

ブチャ虐殺は紛れもない ジェノサイド、拷問遺体 が告発する真実

ウクライナ占領地で暗躍する「スペツナズ」の蛮行

2022.4.7 (木) 伊東 乾

ロシア

ヨーロッパ

+ フォ [?]

安全保障

f シェア 91

in 共有する

1 2 3 4 5

住民の拷問や殺害などの「汚れ仕事」は、年期も浅く、あまり信用できない若者集団である一般軍の命令系統に紛れ込ませるわけにはいかない。何かあった時、責任を問われてしまいます。

さらにこうした「汚れ仕事」を「黒い軍服」の集団つまり「ロシア国家親衛隊」に担当させられないのは当然のことです。

「親衛隊」グヴァルディアはプーチン直属の武力ですから、言い訳ができない。

もし「親衛隊」グヴァルディアが住民殺害などジェノサイドに加担したとなると、その責任追及は錠前工から叩き上げで立身出世した、忠実なる

プーチンのイエスマン、ヴィクトル・ゾロトフ隊長ではとどまらず、トップのプーチンが直接責任を問われてしまいます。

この点、FSBがどれだけ悪逆非道を働いても、その指令責任は（プーチン自身は2代前のFSB長官であったけれど）現役のFSBトップ、アレクサンドル・ボルトニコフ上級大将止まり、と強弁が可能「かもしれない」。

ここではボルトニコフはプーチンの「トカゲのしっぽ切り」になっているわけです。

ここで問題になるのは、そのFSBもただ単にやられているばかりでなく、そろそろお荷物になってきたプーチンを消し、このボルトニコフを担ぐクーデタ計画（<https://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2022/03/post-98349.php>）なども報じられている。

つまり「何でもあり」の残虐集団、FSBそのものも、決して信用されているわけではなく、そのお目付けが「錠前工」ゾロトフ隊長率いる「国家親衛隊」隠密同心グヴァルディアという武力の3重構造が見て取れます。

蛇を殺すナメクジ

「ナチスの二の舞」の回避を狙うプーチン

事実、ゾロトフ隊長は3月14日付、親衛隊向けのウェブサイト「ロシア軍のウクライナ侵攻作戦は望んでいたほど迅速に進まなかった」（<https://jp.reuters.com/article/ukraine-crisis-russia-zolotov-idJPKCN2LB1VW>）という「公儀隠密」的な観測を表明し、西側に報道されています。

ショイグ国防相やゲラシモフ参謀総長が名目上率いている「正規軍」の侵攻が思わしく進まない中、この3月14日あたりにブチャに入った汚れ仕事のFSBスペツナズと、それらが暴走しないようお目付け役で入っている

ゾロトフ指揮下の「国家親衛隊」グヴァルディアは、憲兵的な観点で正規軍やFSBが反プーチンで「反乱」しないよう、目を光らせている。

逆にFSBがいくら市民を殺傷しても、それは「想定範囲内」なので、特段「おとがめなし」。

まさに「隠密同心」として、それなりに大きな武力を現地に送っている可能性が高い。

グヴァルディアの銃口は市民に

← 1 2 3 ④ 5

ブチャ虐殺は紛れもない ジェノサイド、拷問遺体 が告発する真実

ウクライナ占領地で暗躍する「スペツナズ」の蛮行

2022.4.7 (木) 伊東 乾

ロシア

ヨーロッパ

+ フォ [?]

安全保障

f シェア 91

in 共有する

1 2 3 4 ⑤

グヴァルディアの銃口は市民には向けられず、何かヤバいことがあったとき、FSBスペツナズなど「汚れ仕事」実行犯の始末など「口封じ」の役目を担っている可能性が一番高いでしょう。

いわば「蛇」が暴走したとき、それを殺す「ナメクジ」軍隊がグヴァルディアで、その大将がゾロトフ大将、最高司令官がプーチン大統領ということになります。

仮に「FSBによるジェノサイド」があった場合、プーチンとしては「それは軍紀に背いて勝手に行った現地<反革命分子>「蛇」が行った戦争犯罪で、大統領直属の<国家親衛隊>グヴァルディア＝「ナメクジ」軍隊は、それら反革命分子を制圧し、ウクライナ市民を守った<人道的特殊軍事行動>を取っただけであって・・・。

絵に描いたような責任回避のお経を唱えることが可能です。

これをあえて例えるなら、アウシュビッツで莫大な数の遺体が見つかったとき、それらの指示はアドルフ・ヒトラーによるものではなく、ナチス親衛隊指揮官ハインリッヒ・ヒムラーの暴走であったと、ヒトラーが強弁するようなものです。

つまり「反革命分子ヒムラーは、ヒトラー総統の人道的特殊軍事行動の発動命令で、国家秘密警察ゲシュタポの手で鎮圧された・・・」などと言えるよう、指揮系統を分離してある。姑息です。

現実のナチスでは、ゲシュタポ＝ナメクジは親衛隊の一部でしたから、ヒムラーがトップで、そのような言い訳はできませんでした。

そうした経緯を踏まえ、ロシア国家法律顧問としてプーチンの右腕となったペテルブルク大学法学部元講師、ドミトリー・メドベージェフあたりの側近が、このような分散システムを工夫した可能性が考えられます。

しかし、現実にはそのような強弁が通用するわけもなく、蛇もカエルもナメクジも他国への武力侵攻という戦争犯罪、このウクライナ犯罪戦争の全責任はウラジーミル・プーチン以下、戦争指導部全員に問われるものです。

ブチャで発見された無念の遺体、犠牲者の一人ひとりが、ロシア版「ニュルンベルク裁判」の必要を強く求める証人であると言わねばなりません。

もっと知りたい！続けてお読みください

ナチスに酷似する「プーチン親衛

隊」、内部崩壊は間近

← 1 2 3 4 ⑤